



認定NPO法人

JHP・学校をつくる会

JAPAN TEAM OF YOUNG HUMAN POWER

2020

年度事業報告書

2021

年度事業計画書



2020年度 事業報告書

2021年度 事業計画書

CONTENTS

■ ごあいさつ	3
■ JHP の活動・歩み・理念	4-5
■ 学校建設（カンボジア）	6-7
■ 学校建設（ネパール）	8
■ 衛生教育（カンボジア）	9
■ 初等科芸術教育支援事業	10-11
■ 音楽・美術教育支援事業	12
■ CCH・アート・プロジェクト	13
■ 教育支援（幸せの子どもの家）	14
■ 成人識字教育事業	15
■ 災害救援 復興支援	16
アフリカへ毛布をおくる運動	
■ 啓蒙活動	17
■ 組織運営	18-19
■ 今年度実施できなかった事業	20
■ （裏表紙）JHP 行動基準	



ごあいさつ

日ごろ全国各地から寄せられる皆さまの温かいご支援に心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

2020 年度は新型コロナウイルスに翻弄された年だったかと思います。改めて当たり前の日常生活を送れるありがたさ、大切さなどを感じる一年となりました。当会も新型コロナウイルスの影響を受け、一部、例年通り（事業計画通り）の活動ができませんでしたが、臨機応変に対応し、活動してまいりました。コロナ禍でも活動ができますのは、皆様のおかげであり感謝の気持ちでいっぱいです。

私どもは、1993 年 9 月の設立以来、「できることからはじめよう」をモットーに、皆様のご支援によりカンボジアに 362 棟、ネパールでも 16 棟の校舎を建設寄贈して教育支援活動に取り組んで参りました。また、カンボジアの音楽や美術教育の発展に基本創りから取り組み、教科書や指導書づくりに大きく貢献をしています。識字クラスは第 3 期がスタートいたしました。

2021 年度は、また気持ちを新たに様々な支援活動に取り組んでまいります。私たちになにができるか、よく話し合い、より良い活動を続けていきたいと思っています。

一日も早くコロナが収束し、穏やかに生活ができることを願っております。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

山内美江子



JHP の活動・歩み

1990	イラクに入国できず、ヨルダンにて活動。	
1991	JHPの前身であるJIRACとして湾岸戦争後に取り残されたクルド難民の救援を学生達とイランで実施した。 小山内美江子と二谷英明らがカンボジア難民救援のため、タイ国境キャンプを視察し準備に入る。	
1992	タイ国境からのカンボジア帰還難民救援活動の中から、子どもたちのための学校建設の必要性を把握。	
1993	9月15日にJIRACの中から「カンボジアのこどもに学校をつくる会」を設立。 カンボジア活動隊派遣開始（以降年2～3回を継続）。	(写真A)
1994	JEN設立に代表小山内が参画。駐在員1名をユーゴスラビアへ派遣。	
1995	阪神淡路大震災発生。当日から救援活動開始。 カンボジアにプノンペン事務所設置。旧ユーゴスラビア隊を定期的に派遣。	(写真B)
1996	音楽教育プロジェクト開始。カンボジアに音楽教師1名を派遣。 アフリカに毛布を送る運動の構成団体として学生の現地派遣開始。	
1997	4月より会費会員制に移行して、「JHP・学校をつくる会」に改称。 地雷廃絶日本キャンペーン(JCBL)の構成団体となる。	
1998	カンボジア教育省とNGO活動の合意書を結ぶ。	(写真C)
1999	美術教育プロジェクト開始。日本人教師1名派遣。初の絵画展を開催。	
2000	10月に東京都より特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を受け、11月に登記完了。 プノンペン市認定の音楽教師7名を誕生させる。	
2001	JENの構成団体としてインド地震救援隊4名派遣、テントなどを支援。 カンボジア王国と覚書を交わし正式なNGOに認められる。	
2002	ユニセフと合同でアフガニスタン支援実施。駐在員1名派遣。 JHP初の孤児院完成。CCH(幸せの子どもの家)支援開始。	(写真D)
2003	JHP初のラオス校舎完成、ボスニア活動隊4名派遣、100棟目の校舎完成。	
2004	1月1日に日本で19番目に国税局より認定NPO法人の認知を受けた。 新潟水害、中越地震の支援活動実施。	
2005	カンボジアにて第1回音楽コンテスト実施(以降年1回実施)。 JHP・藤原紀香カンボジア子ども教育基金スタート。	
2006	小山内美江子 国際ボランティア・カレッジ開催。 代表小山内がカンボジア王国よりモニサラボン大十字勲章受章。	
2007	設立15周年記念祝賀会を開催。マーチングバンド、CCHの子どもが来日出演。	
2008	1人1万円の呼びかけで631人が賛同し、200棟記念校舎が完成。 代表小山内が第20回毎日国際交流賞を受賞。	
2009	国際ボランティア・カレッジが第3回浄土宗共生(ともいき)・地域文化大賞を受賞。 新たな支援対象国の候補としてネパール調査を実施。	
2010	アカウンタビリティ・セルフ・チェック2008を実施。	
2011	東日本大震災発生(3月11日)。仙台市若林区、南三陸町にて支援活動を行う。 平成23年度外務大臣表彰を団体として受賞。 JHP初となるネパールでの学校建設を開始する。	(写真E)
2012	JHP創設者の一人で元副代表の二谷英明氏が1月7日に逝去する。 公益財団法人かめのり財団より、「第5回かめのり賞」の表彰を受ける。 JHP行動基準が制定される。(詳細は裏表紙を参照)	
2013	JHP初となるネパールでの校舎が2棟完成し、贈呈式を行う。 300棟記念校舎が完成。	(写真F)
2014	2月24日に東京都より認定NPO法人の認定を受けた。 設立20周年を祝う、記念の集いを開催。 教育支援事業の充実を目指した「ドレミとアート基金」設立。目標300万円を達成。	
2015	外務省日本NGO連携無償資金協力の助成事業に採択される。	
2016	熊本地震発生。益城町への継続支援を実施。(4月～) JICA草の根技術協力事業「カンボジア王国 初等科芸術教育支援事業」が開始される。(8月)	
2017	ASACカンボジアに学校を贈る会より識字教育事業を継承。2018年9月から教室開講。	
2018	JHP25周年記念祝賀会開催。	(写真G)

JHP の理念

JHPは、戦争や自然災害で教育の機会を奪われた世界の子ども達に、人種、国籍、宗教、その他の信条の違いにかかわらず広く教育等の援助を行ない、また紛争や自然災害による被災地・被災者への救援活動と、これらの活動を通じて次代を担う若者達への地球市民教育を実践することを目的とする認定NPO団体です。



(写真 A) カンボジア活動隊派遣開始



(写真 B) 阪神淡路大震災救援活動開始



(写真 C) カンボジア教育省と合意書締結



(写真 D) CCH 支援開始



(写真 E) 東日本大震災支援活動開始



(写真 F) 300 棟記念校舎完成

■設立経緯

代表の小山内美江子は、1990年の8月、イラクによるクウェートへの武力行使によって勃発した湾岸戦争に際し、ヨルダン難民キャンプに出向き、はじめての海外ボランティアを経験しました。湾岸戦争時、「顔の见えない日本人」と批難されたことが行動の原点であり、共に活動した大学生の日々の成長に小山内が感動したことが、後のカンボジアでの活動に繋がっています。

JHPの前身団体JIRAC（日本国際救援行動委員会）でカンボジア担当だった小山内美江子と故二谷英明（俳優、JHP元副代表）が、パリ和平協定調印後の1991年12月にタイ国境の難民キャンプを視察し、更に92年活動の調査のため、カンボジア入りしたあと、1992年7月から学生らと共にタイからの帰還難民の救援に汗を流しました。その時の活動を通じて、学校建設の必要性を痛感し、1993年9月15日に同JIRACの中から「カンボジアのこどもに学校をつくる会」を設立しました。

1997年4月より会費会員制に移行して、「JHP・学校をつくる会」に改称。2000年10月に東京都より特定非営利活動法人（NPO法人）の認証を受け、11月に登記を完了。2004年1月1日に国税庁より認定NPO法人の認定を受けました。



(写真 G) JHP25 周年記念祝賀会

学校建設 (カンボジア)

■建設支援リスト (生徒数、教員数は2020-2021最新の情報です)

建設 累計	支援学校名	地域	受益者		主な支援内容							
			生徒数	教員数	校舎		トイレ		机/ 椅子	井戸 水タンク	手洗場	靴箱
					棟	室	棟	室				
357	バイドムラン小学校	バットタンバン州	242	9	1	5			62			15
358	トゥールスノール小学校	バットタンバン州	175	5	1	4	1	3	4	1		12
359	サマコム小学校	トゥボークコム州	413	13	1	5			116			15
360	ポーロング小学校	ブレイベン州	454	8	1	4	(1)	(4)	126			
361	ブレイスノール小学校	ブレイベン州	205	5	1	1			34			3
校舎補修	チサラランセイ小学校	スワイリエン州	470	19	(1)	(5)						
付帯設備	タベン小学校	トゥボークコム州	96	5							1	
付帯設備	ソビアメングル小学校	コンボンスプー州	364	10							1	
付帯設備	コーカチョーク小学校	ブレイベン州	436	10			1	2				
付帯設備	ブーチャン小学校	ブレイベン州	229	8							1	
付帯設備 トイレ補修	タナーカン小学校	ブレイベン州	465	14			1	3			1	
2020年度実績			3,549	106	5	19	3	8	342	1	4	45
362	クナーチチュン小学校	トゥボークコム州	316	11								

* 358校目の机と椅子は、日本からのリサイクル品を160セット寄贈。教師用4セットのみ現地購入 (P7参照)

* 実績の () 内の数字は、既存施設の補修棟数と室数を示します。2020年度の実績には加算しません。

* 362校目は2020年度内に未完成の為、実績は2021年度に加算します。



バイドムラン小学校



サマコム小学校



トゥールスノール小学校



上) 天井が落ちてこない様に支棒をしている
下) ポーロング小学校新校舎の教室

■支援概況

各地の学校や州、郡の教育局から寄せられた要望書に基づき、主に

- ①教室数の不足度 ②校舎の老朽化や倒壊の危険性
- ③生徒数の増加程度 ④校舎以外の設備の必要度

をスタッフが直接確認し、優先度の高い学校から建設を行いました。

今年度はカンボジア 5 州に小・中学校 5 棟 19 室、校舎補修 1 棟 5 室、トイレ 3 棟 8 室、給水施設 1 基、手洗い場 4 基を建設し、総受益者は生徒 3,549 名、教員 106 名の成果を得ました。

これにより、カンボジア国内での校舎建設数はカンボジア 20 州で、362 棟 (着工済校舎を含む)、ラオス 1 棟とネパール 16 棟を加えた総実績は 379 棟となりました。

また、年間を通して学校調査を行い、今後の事業継続のための情報収集と支援者への提案を行いました。

■カンボジアにおける校舎建設の実績

2019～2020 年度 of 教育省統計では、公立の小学校は 7,282 校、中学校は 1,247 校、高校は 544 校で合計は 9,073 校となり、前年度より 74 校増えています。その中で、JHP は支援校 291 校 (約 3.2%) の支援に携わっています。

■カンボジアと日本を繋ぐ各種コーディネート

安全を十分に確保し、校舎贈呈 (1 回)、付帯施設贈呈 (1 回) を実施しました。ボランティア活動は延期または 2020 年度は中止といたしました。

■カンボジアと日本間の交流

新型コロナウイルス感染拡大を受け、贈呈式やボランティア派遣は、延期または中止といたしました。今年度はビデオレターや手紙を通じて遠隔でのコミュニケーションをコーディネートしました。



左) 日本の支援者から手紙を受け取る校長先生



右) 日本の支援者に向けた手紙を読む生徒 (後ろは支援の衛生物資)

プロジェクトの背景

国際機関や NGO 等の援助により、カンボジアの状況は改善されつつあるが、都市と遠隔地の経済格差やインフラ（教育環境を含む）の格差は拡大している。小学校の就学率は上昇しているが、不完全校（6年生まで受け入れができない小学校）や教室不足の学校、老朽化が進み危険な校舎を利用している学校は未だに多い。中学生は増加しているものの、就学率は約6割に留まっている(*)。中学校では、教室や教員不足を招いている学校も多く、生徒が過密な環境で学んでいたりと、正規の時間数が学べなかったりなどの弊害も出ている。また、公立幼稚園の数と児童数の増加、都市部での私立学校の増加などの傾向が出ている。

(*)2019-20 就学率 都市部 55.7%、農村部 56.9%

■学習環境と衛生環境を維持、向上させるための継続支援



(左) 先生から消毒用アルコールを塗ってもらう生徒
(右) バイトムラン中学校に寄贈された文具



政府(*1)は衛生用品を各学校自前で揃えるよう指示しましたが、学校の予算が不足しているために、学用品、図書などと同様、十分には賄えません。2020年度は、15校に対して、文具・教材、図書とともに、衛生用品（アルコール、マスク、石鹸）を寄贈しました。

(*1) 教育・青少年・スポーツ省

■「江東区」及び「江東区海外リサイクル支援協会」との連携で中古机・椅子を輸送



(左) トールスノール小学校 日本の子供達からのパネルを受け取る教員
(右) 積み込みを待つ寄贈された机と椅子



休校に伴い、2020年度に延期となっていた寄贈を受けた机と椅子200セットのうち160セットをバットンバン州トゥールスノールに、残り20セットを同州2校に寄贈しました。また、2021年度の寄贈に向け、2020年はボランティアの参加は控えて、関係者のみで椅子と机、楽器の積み込みを行いました。

■インタビュー

カンボジアの学校は新型コロナウイルス感染防止のため、2020年3月中旬から9月初旬まで全国一斉閉校しました。その間の学校の状況、奮闘された事に関してインタビューを実施しました。



学校名：オンクローン小学校
名前：プロコン・チャンナ校長先生
教員経験 4 年、校長経験：10 年

新型コロナウイルスの感染防止のために閉校していた期間は、政府が推奨したテレビやオンラインを通して自宅で学習をしました。しかしながら、家にテレビやインターネットがない生徒もあり、理解度にはばらつきがありました。各教員が自宅で 4-5 人の少人数のグループ学習を実施しましたが、教員の数に限りがあるため、各生徒は十分な学習時間を持つことができず、昨年度はカリキュラムを終えることができませんでした。

また、コロナ禍で地元での仕事が減ったため、タイへ出稼ぎに行く家庭や、家計を助けるため働き始める生徒、お寺へ出家する生徒が増え、途中退学者の数は例年と比べて増加しました。新型コロナウイルスにより、特に、貧しい家庭は教育に対する興味が減退しつつあります。新型コロナウイルス終息後、途中退学した生徒達が戻ってくることを望んでいます。

■カンボジア国内の教育機関 感染対策

2020 年

- 3 月 幼稚園から高校までのカンボジア国内における全ての教育機関が休校。
- 4 月 教育大臣省が、学校長と教員に向けて、オンライン学習の周知等書簡指示を出す。
- 8 月 教育・青少年・スポーツ省が、全公立学校に対して学校再開におけるガイドラインを発行。
- 9 月 学校再開。
- 11 月 市中感染者が判明したため、11 月 30 日をもって本学期終了。年末まで閉校。

2021 年

- 1 月 新学期、学校再開。



グループ学習の様子

学校建設（ネパール）

■ネパール校舎累計で 16 棟 70 教室完成 新たに3校舎建設へ

2011 年に始まったネパールに於ける学校校舎建設支援活動は 2019 年度末までに 14 棟、63 教室が完成しましたが、2020 年にはさらに 3 月に K 様寄贈のラックスミナラヤン学校 2 教室、H 様寄贈のサガルマータ学校 5 教室が完成し、贈呈式を予定していました。しかし両校ともコロナ禍対策としてネパール政府が 3 月にとったロックダウンのため最後の外壁塗装工事を残し工事が中断してしまいました。

贈呈式を秋に延期しましたが、ロックダウンは 8 月に解除されたものの日本からの航空便はなく秋にも贈呈式は実施できませんでした。学校の使用をドナー様方はご了承くださいましたが、学校の閉鎖はその後も続き、ようやく 2021 年当初より隔日出校や短縮授業ながら学校が再開され教室も使用され始めました。

またこの 2 校に引き続き 2020 年 10 月完成を目指してさらに 2 校の着工を予定していましたが、工事開始は半年以上遅れ、2020 年 10 月より A 様寄贈のバルスボディーニ学校の建設を開始し、2021 年 3 月よりもう 1 校の G 様寄贈のアムリット学校の建設が始まったところです。このようにコロナ禍によりおおむね半年間の活動休止を強いられ支援活動は遅れましたが、ネパールにおける学校建設事業は継続することができました。

JHP のジャバにおける校舎建設事業は地域の支援も得て大成功を収めています。JHP の支援は学校当局、ジャバ教育局、村の人々に大変感謝されています。子どもの親たちは、子どもたちが屋根の高い広々とした、換気のよい教室で、立派な机と椅子で勉強している様子を見て大変喜んでいます。

すし詰め教室で勉強に励んでいるネパールの子供たちの教育環境を少しでも改善するため、引き続き皆様のご支援を切にお願い申し上げます。



ラックスミナラヤン学校の校舎



ラックスミナラヤン学校校舎と生徒たち



サガルマータ学校の校舎



サガルマータ校 生徒たちで満員の教室



建設中のバルスボディーニ学校

プロジェクトの背景

JHP の学校建設プロジェクトは、2011 年にネパール東南部に位置するジャバ県で開始されました。ジャバでは、学校はきちんと機能しているものの、校舎数が非常に不足し、子供たちは教室の水準に達しない狭い部屋に押し込まれ、でこぼこな床、雨が降ると水漏れるトタン屋根、設備の不十分な教室で勉強していました。こうした状況を調査により把握後、JHP はネパールでの学校建設プログラムを開始させることを決定しました。支援の目的は、学校校舎を建設すること、特に僻地の村に学校を建設することでした。この支援により生活に困窮した貧しい農家の子供たちがこれまでより良好な環境で教育を受けられるようになりました。

衛生教育（カンボジア）

■衛生環境を整え、安心、安全な学校生活を

2020 年度は新型コロナウイルスの為に、衛生に対する意識が大きく変化した年でもありました。最近まで地方の公立学校では、手洗い場を設置している学校は限られていました。石鹸と清潔な水が使える手洗い場を確保するよう政府からの通達を受け、バケツを置いて簡易手洗い場を設ける学校が増加しました。（写真1）

また PVC パイプを、給水タンクから繋いで校舎の壁に固定し、緊急の簡易手洗い場を設置するなど、各学校では手を洗うためにさまざまな工夫が実施されました。（写真2）

JHP では 2020 年度 4 基の手洗い場と、3 棟 8 室のトイレの支援を 6 校に対し実施しました。

手洗い場を設置した学校の関係者：

「今まではバケツを使って手洗いをしていたため、衛生上問題がありました。手洗い場設置後は、手洗いが習慣化して衛生指導もしやすくなりました。親も安心して子どもを学校に送れるようになりました。」

支援者の皆様からのご支援は、子ども達を新型コロナウイルスから守り、安全で安心な学校生活を実現する大きな助けになっています。



（写真1）手洗い用バケツと桶



（写真2）パイプの簡易手洗い場



支援された手洗い場

2019-2020 年度教育省統計

小学校で水がない学校：32.8%、トイレがない学校：27%



支援されたトイレ



支援された手洗い場で手洗いする生徒たち



手洗い場が設置された後、衛生的な学校環境を保ちやすくなりました。生徒達にはトイレの後、泥遊びをした後、食事の前に手洗いをするよう指導しています。また、教室に入る前には手をアルコールで除菌しています。学校で、子ども達に良い衛生習慣と知識が身に付き、それを家庭で両親や兄弟と共有し、実践している生徒もいます。

立派な手洗い場と衛生用品をご支援いただき、ありがとうございます。

プーチャン小学校 ノン・チア校長先生



初等科芸術教育支援事業

2020年度 JICA草の根パートナー型「カンボジア王国 初等科芸術教育支援事業」

コロナ禍に見舞われた2020年、カンボジアでも新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために全校休校や自粛要請などの措置が取られ、当事業で予定されていた活動の多くも延期を余儀なくされました。また、活動が再開されてからも、感染拡大状況の変化に伴い、学校の閉鎖や自粛要請などが不定期に続いており、事業の見通しをたてることが難しくなっています。2021年度は当事業の最終年次となるため、現地カウンターパートと協力しながら、予防対策を十分に行った上で事業目標を達成できるよう活動に取り組んでいきます。

■初等科芸術教科の生徒用教科書および教師用指導書づくりを継続

カンボジアの教育省の職員で構成されているワーキンググループとともに、初等科芸術教科の教科書と指導書づくりを継続して進めています。芸術教科の教科書・指導書は、大きく「美術と手工芸」と「音楽と踊り」の2つの科目に分かれています。1～3学年の教科書・指導書は、美術科目、音楽科目ともに印刷会社によるレイアウトやワーキンググループとの校正作業が進んでおり、完成形が見えてきました。

●美術と手工芸

新型コロナウイルスの影響による全校閉鎖によって、4～6学年の教科書・指導書作成に必要な学校での授業実践の活動が大きな影響を受けました。学校が再開されてからも、新型コロナウイルスの状況に合わせて学校の閉鎖と再開が繰り返されていることから、学校閉鎖期間にも活動を進められるよう、オンライン等を使用した代替方法を模索しています。タケオ州では、パイロット対象校での1～3学年の教科書・指導書を使ったトライアル授業が開始され、今後は、このトライアル授業から得られるフィードバックを基に、更なる改訂の作業に取り組んでいきます。

●音楽と踊り

音楽科目の教科書・指導書づくりは、カンボジア人音楽専門家とともに、日本の音楽教育専門家による資料とアドバイスを基に、カンボジアでの会議、作業を中心に行われています。1～3学年のページのレイアウトも固まり、まもなく美術と手工芸の教科書・指導書と同じように、学校でのトライアル授業が始まる予定です。



教科書・指導書作成のための実践事業の様子

プロジェクトの背景

カンボジアの音楽・美術教育は、教育課程の中で独立した科目でなく、「社会科」の一部として位置づけられており、指導に十分な時間数がありません。また、学校の経済状況や教員の技術・知識が十分でないことから授業が実施されていないケースもあり、子どもたちが音楽や美術を通して情操を育む機会は極めて少ないといわざるを得ません。そのような中、カンボジア教育省のカリキュラム改訂に伴い、芸術教科が独立教科として採用される運びとなりました。教育省内での芸術教科の教材及び人材の開発が急務となったことから、長年教育省とともに芸術教育の普及を実施してきたJHPがイニシアチブを取り、教育省、JICAとともに芸術教科カリキュラム開発に取り組むことになりました。

■パイロット事業

パイロット事業においても新型コロナウイルスの影響は大きく、タケオ州での教員研修では、音楽科目の研修は2020年3月に予定通り実施されたものの、美術科目の研修は中断されました。その後、学校閉鎖や会議・研修の自粛要請期間が続き、2021年2月に、待ち望んだ美術科目の研修を再実施することができました。現在、研修を受けた先生方は自分の学校へ戻り、教科書・指導書を用いて自分のクラスの生徒へのトライアル授業を開始しています。

【教員研修の実施】

対象者および対象地

講師：ナショナルトレーナー候補

(プノンペン教員養成大学の芸術科教師8名)

対象地および対象校：カンボジア王国タケオ州2郡の小学校4校

対象者：対象校4校の1年生から6年生までの担任教員1名ずつ、
各校の学校長、対象郡教育局職員2名、州教育局職員1名

実施スケジュール

教員研修（音楽科目1～3年）：2020年3月9～13日

教員研修（美術科目1～3年）：2021年2月1～4日

*当初予定していた2020年3月16～20日の美術科目研修は、新型コロナウイルスの影響により中断・延期。また、2021年に再実施した研修では、感染対策として対象人数を減らし、1～3年生の担任教師のみ参加しました。

【トライアル授業の実施】

教員研修後、対象4校を訪問し、材料・用具、衛生資材の寄贈、新しい1～3年生の教科書・指導書の印刷物の配布を行いました。現在、各校の対象教員は、自身が受け持つクラスの生徒を対象に、振り分けられた題材のトライアル授業を行っています。2021年度は、各校から集まったフィードバックを基に、1～3年生の教科書・指導書を改訂し、最終化する作業を行っています。

※2021年2月末日時点



「仮面劇」の鑑賞の授業体験



石を使った造形あそびの授業体験



研修前の感染予防対策の実施



教科書を使用したトライアル授業



トライアル授業用の材料用具の寄贈



トライアル授業で友だちの作品を鑑賞する生徒

音楽・美術教育支援事業（フォローアップ事業）

■地域や学校に根づいた音楽・美術教育を目指して

これまでにカンボット・スバイリエン州で実施した美術教育支援パイロット事業、そして、プレイベン州のコンポントラバイク郡で実施した音楽教育支援パイロット事業。これらの対象地において、郡の教育局や対象校が、それぞれ自分たちの手で美術・音楽活動を継続していくために必要とされる支援を継続しています。また、指導者がいながら、楽器の不足で音楽の授業の実施が難しい学校や教育機関などへの楽器寄贈も幅広く行っています。

●美術（カンボット州、スバイリエン州）

【美術の授業の継続、自校開催の絵画展などを目的とした画材の寄贈】

昨年に引き続き、カンボット・スバイリエン両州の32校における美術の授業の継続、ならびに自校開催の絵画展の実施を側面支援するために、画材の寄贈を実施しました。



カンボット州・スバイリエン州での画材寄贈

また、株式会社山田養蜂場が主催する「第7回ミツバチの一枚画コンクール」の海外作品部門において入賞した Seng Ravin さん、Sose Srphynase さんへ賞状を授与しました。

第8回のコンクールには、新型コロナウイルス感染拡大の影響で出展が叶わなかったため、2021年度は、第9回コンクールへの出展に向け、準備を進めています。



一枚画コンクールの賞状を受け取る受賞生徒と校長

●音楽（プレイベン州コンポントラバイク郡）

【音楽講習会および郡や対象校による音楽イベントの開催支援】

新型コロナウイルス感染拡大により、学校が休校となったことや、20人以上の集会在制限されたことから、教員への音楽研修や学校主催のイベント開催は見送られました。

2021年度は、コロナ禍での新たな活動の形を対象地域や学校と協議していく予定です。

●楽器寄贈

【地域や学校への楽器寄贈】

例年リクエストの届いた教員養成校や中学校などへ楽器の寄贈を行ってありますが、新型コロナウイルス感染拡大により、長期にわたり学校が休校となった影響で、今年度の寄贈は見送られました。

CCH・アート・プロジェクト

■自己表現活動を通した、青少年の健全な育成を目指して

本事業は、ローラ・ワールドスカラシップ基金の支援により 2015 年より実施しています。子どもたちが想像性や感性、創造力、表現力などの資質能力を発揮できる場を提供することを目的とし、様々な自己表現活動を実施しています。

○アートクラブ

毎週金曜日をアートクラブの日として、美術や音楽に関わる様々な表現活動を行っています。新型コロナウイルス感染拡大の影響で長期にわたって学校が休校となり、今年度は開催が大幅に制限された期間もありましたが、開催時には元気な子どもたちの声が響きました。



アートクラブの様子

○絵画展「在日外国人児童が描く私の好きな日本」へ参加

今年は、NPO 法人国際教育情報交流協会、NPO 法人市民の芸術活動推進委員会が主催する絵画展に 50 点の絵を出展しました。子どもたちの作品は日本の会場で展示されたほか、冊子となってカンボジアに届けられました。



題「カラフルな都市」



「私が描いた絵はこれよ」

教育支援（幸せの子どもの家）



支援者の皆さまへ

CCH所長（理事）メチ・ソカ

2002年のCCH設立以来、CCHの子どもたちは皆様からのご支援でよりよい人生を送ることができております。

彼らはCCHが運営する小学校や中学校で勉学に励んでいるほか、スキルトレーニングも受けています。中には高校や大学を卒業した者もあり、就職し家族やカンボジアの社会を支えるまでに成長しています。

彼らに代わりまして改めて JHP や支援者の皆様に感謝申し上げます。

項目	男子	女子	合計
小学生	9	7	16
中学生・高校生	5	9	14
ドンボスコ	4	2	6
カンボジアの大学在籍者	1	1	2
海外の大学在籍者	1	0	1
貧しいコミュニティでサポートしている子ども	10	10	20

2021年3月31日現在



裁縫クラスの様子



授業の前には手洗いを欠かしません



CCHが運営する小学校に通う子どもたち



コンピュータクラスで学ぶ子どもたち



食事の配膳を手伝う中学生たち

プロジェクトの背景

ポルポト時代に家族を失った経験を持つソカ氏の孤児院設立の構想に対して、2002年に当会が施設を建設し、創設に携わった。贈呈式は2002年11月30日。主にゴミ山で生活していた孤児等を調査面接し、就学意欲のある16人の支援から開始した。CCHはCenter for Children's Happinessの略称。

日本語では「幸せの子どもの家」と呼ぶ。カンボジアのNGOとして正式に登録されていて2021年3月現在30人が在籍している。CCH内で運営されている小学校には、CCH内部の子ども16人の他に、外部の子ども66人を受け入れている。

成人識字教育事業

第2期の識字事業は、途中、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、一時休講していた期間もありましたが、全員が8カ月間のコースを終え、修了証書を受け取ることができました。第3期目の識字クラスは2021年2月中旬に開講式を行い、コンボンチャム州バティエ郡内にある非識字率の高い4村で80名の生徒を対象に識字クラスを実施しています。（新型コロナウイルス感染防止のため、人数を例年より減らしています。）この事業では、生徒が読み・書き・計算の知識を得ることによって、生活の質の向上に繋がることを期待しています。第3期の識字クラスでも80人全員の生徒の合格を目指し、現地カウンターパートと共に、一つのチームとして全力で取り組んでいきます。



教員養成コース



識字クラス開講式



識字クラスの様子

識字クラス生徒の声

文字が読めない、書けないとニュースを読めず、手紙が来ても、他の人に頼るしかありません。1桁台の計算はできますが、それ以上は分かりません。私が小さかった頃は内戦真っただ中で、生き残ることのみ考え、学校で勉強することは、考えられませんでした。今生きていることは奇跡です。村長さんから識字クラスが開講される話を聞いたときは、嬉しかったです。識字クラス修了後は、基本的な読み、書き、計算の能力を身につけ、農業の分野で何か新しい事にチャレンジしたいです。

名前：シェム・アオックさん(54歳)

職業：農婦



クメール語の読みを練習している受講生

識字クラス教員の声

私のコミュニティで識字クラスが開講されて嬉しいのです。成人に対して指導するのは初めてで、生徒により基礎知識のレベルが異なるので、そこが学生に指導する点と異なり、チャレンジだと感じています。また、昼間は働かなければならないため、授業に遅れてくる受講生もあり、指導内容やスピードを調整することも大事です。受講生には授業、学習が楽しいと感じてもらえるよう、さらに内容を改善していきたいです。8カ月間のクラス修了後、受講生全員が基本的な読み、書き、計算の能力を身に付け、日常の中でその能力を活かし、最終的に生活の質の改善、収入の向上に繋がればと思います。

そして、子ども達や若者にいい影響を与える人になって欲しいです。そのお手伝いをする事ができて、

嬉しいです。伝統的な考え方とは異なりますが、教育を受けるのに年齢制限はありません。8カ月間ベストを尽くします。



名前：リーン・キムレン先生
識字教員：コンボート村担当

災害救援 復興支援

■東日本大震災から10年が経ちました

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方に壊滅的な被害をもたらしました。

JHPは、発生直後に宮城県南三陸町へボランティア隊を送り、現地役場と協働してボランティアセンターを立ち上げました。

“忘れないで3.11”、町民の方々の心の中には忘れられない思いがあります。

少しでも笑顔を取り戻そうと先頭に立ち上がったのが“JHP 三島”。山岡理事の呼びかけで2012年から始めた桜の植樹並びに維持活動は、回を重ねて12回目を迎え、累計1,600本を超えました。背丈を超える河津桜が、今年も見事に満開になりました。

昨年3月には、新たに120本の苗木の植樹を行いました。ますます「桜の名所 南三陸」として、桜の花が復興の希望の象徴となるよう願います。



満開に咲いた桜（左）と準備した桜の苗木（右）

■令和2年7月豪雨による甚大な被害

昨年7月の熊本県南部を襲った豪雨は、各地に甚大な被害をもたらしました。

JHPは、熊本県の中でも被害が大きく、カンボジアへの学校建設支援により、長年繋がりのある芦北町を中心に支援を行い、皆様から寄せられたお見舞金を芦北町災害本部にお届けしました。町長様からも、早々にお礼の手紙が届きました。

熊本県芦北町の「芦北町国際交流協会」では、国際交流が盛んに行われ、カンボジアの小学校の音楽教員の研修生14名の受け入れ事業を実施されました。当時の研修生たちは、現在カンボジアで校長先生や指導者となっています。

また、今までに学校建設支援として、町民のご寄付で6棟の寄贈をされました。贈呈式には、芦北町の子どもたちも参加し、現地の子どもたちとの交流も行われてきました。

豪雨災害発生時には、そうしたカンボジアの学校からも、JHPを通じて被災地域へお見舞いの手紙が届きました。国を越え、交流を深めてきた絆を改めて感じることでできた機会となりました。



2021年度もコロナ禍が続くため、ほとんど毛布収集活動はできないと思われますが、アフリカへ毛布をおくる運動自体は継続されることになっています。毛布が手元に余っておられたらご協力をお願いいたします。

アフリカへ 毛布をおくる運動

■アフリカへ毛布をおくる運動

アフリカへ毛布をおくる運動は2020年で37年間継続されました。この間にアフリカへ送られた毛布枚数は420万枚に達します。アフリカ諸国ではまだ大勢の高齢者、孤児、身体障害者、エイズ患者、自立困難者、自然災害被災者、難民などが毛布を待っています。

2020年はコロナ禍のため毛布収集活動期間を7月末まで延長しましたが、十分な毛布収集活動はできませんでした。それでも5,116枚の毛布が集まり、マラウイ、モザンビークに送られました。

啓蒙活動

コロナ禍だからこそ、世界にも目を向けてもらえるように



■カンボジア・ネパールの「今」を発信

JHPでは、世界的な新型コロナウイルス流行により、国と国の行き来が難しい状況の中だからこそ、「できることから始めよう！」をモットーに、当会の現地スタッフを通じ、カンボジア・ネパールを身近に感じていただけるような現地最新情報をメルマガやSNSを通じて積極的に発信する取組みを行いました。

■オンラインを活用した活動紹介オリエンテーション

JHPの活動やカンボジア・ネパールの様子について紹介し、国際協力や国際支援をとともに考える機会として、オンラインのオリエンテーションを実施しました。参加者は、特に大学生に多い傾向にあり、この機会に「自分のやりたいこと」に改めて目を向け、国際協力へ興味を持ちアクションを起こしていこうとする様子が多く見られました。

また、そういった大学生を対象とした新たな取組みとして、大学ボランティアセンターと連携し、大学ホームページのボランティア情報サイトより、当会の活動紹介映像が視聴できる環境を整備しました。今後もオンラインツールを活用し、更に国際協力を身近に感じてもらえるような取組みをしていきます。

諸活動を認知いただく取り組み

活動名	主な内容・実績
JHPニュース発行	○年2回発行。部数2,500部。 ○カラー印刷、透明封筒の活用を継続。 ▶データーのPDF送信数は56件（‘21/3 上旬現在）
ホームページ運営	○JHPの諸活動や体制に変更・新設や、イベント等のお知らせ情報が生じる都度、作業を実施。 ▶サイト訪問件数17,882件/年
メールマガジン	○年22回発行。閲覧者1,250人（‘21/3 上旬現在）
SNSの活用	○メールマガジン未登録の方への情報提供や、会の日常的な話題の紹介、イベント当日の話題提供としてFacebookとTwitterを活用した。 ▶FaceBookフォロアー：945人（‘21/3 上旬現在） ▶Twitterフォロアー：390人（‘21/3 上旬現在）
講演・講義等	○コロナの影響により、役職員が年1回実施した。
来訪者受け入れ	○コロナの影響により、ブノンペン事務所が在住者2名を対応した。
カレンダー販売	○656部（壁掛け型:383部・卓上型:273部）を販売した。

組織運営

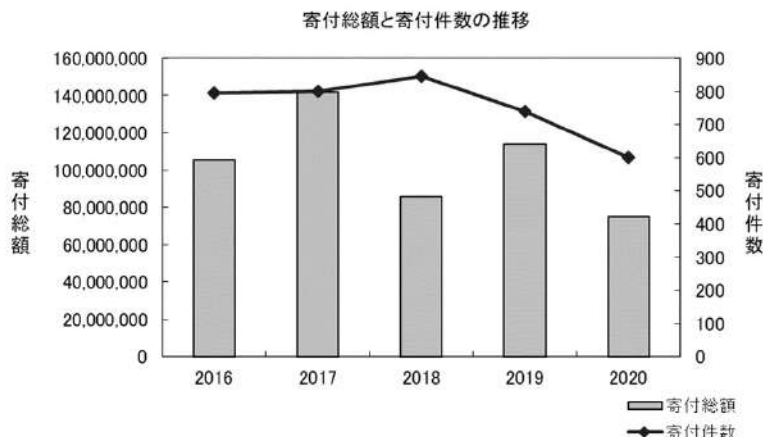
会員数 477人(2021年3月現在)

	正会員	賛助会員
一般	312	127
特別	6	10
学生	21	1

前年比62人減

新規会員3人

寄付金 601 件 74,801,163 円



皆様からの各種ご寄付・寄贈

●お宝エイド

「もの」で寄付する JHP・学校をつくる会 お宝エイドプログラム。

皆様のご家庭や会社で眠っている品々がカンボジア・ネパールの教育支援になる新しい寄付の仕組みです。お宝エイドのご協力により10%をめぐりに上乗された金額がJHP・学校をつくる会への寄付となります。

今年度実績：248,176 円

●BOOK SMILE

皆様の読み終わった本やCD・DVDなどをブックオフオンラインが買取り、その買取金額+10%がJHPへのご寄付となります。

今年度実績：11件 箱 37,134円

(BOOK・OFF 上乗せ分10% 3,374円含む)

※BOOK SMILEサービスは2020年度を持ちまして終了致しました。今までにご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

●スカイウィッシュチャリティプログラム

デルタ航空のマイレージプログラムよりJHPへマイレージをご寄付いただけます。個人の方はもちろん修学旅行など学校単位でのご寄付の輪も広がっています。

今年度実績	
受領マイル	約300万マイル
利用マイル	0 マイル
年度末残数	約2,800万マイル

●書き損じはがき

寄付数：3,804枚

●未使用切手

192枚 6,499円

●クレジットカード

利用数：112件 (1,714,700円)

●寄付サイト

6つのサイトより376,194円を受けました。

●募金型自販機

2台設置

各種会議の報告

会議内容	2020年度の主な内容・実績
会員総会	2020年6月29日（日）開催。 出席者144名（委任状含む）。 2019年度事業及び決算報告、 2020年度計画及び予算報告を行った。
理事会	第143回～144回まで年2回実施。
運営協議会	理事と事務局の情報共有、理事会審議事項の 協議・検討の場として年6回実施。
定例ミーティング	東京事務所（逐次） プノンペン事務所（週1回）実施した。

助成金・実施実績

今年度は、下記の助成金を申請し、採択されました。

名称	対象事業
連合「愛のカンパ」	成人識字教育事業
歳末助け合い運動 による地域福祉助成	広報事業 (実施：2021年度)



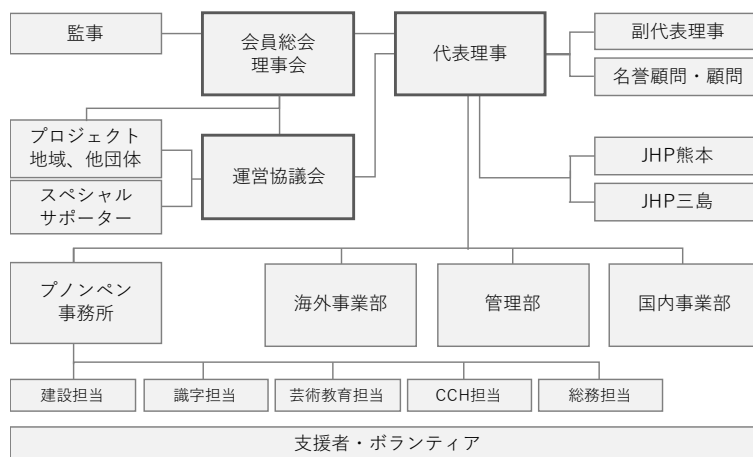
■ボランティア受け入れ

東京事務所では、例年ボランティアの皆さんの受け入れを行ってまいりましたが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、通常の活動が難しい状況が続きました。

そんな中でも、レギュラーボランティアの皆さんを中心に楽器清掃活動にご協力いただき、十分な感染防止対策の下、年間4回の実施、合計25名の参加をいただきました。カンボジアへの鍵盤ハーモニカの輸送台数は20箱、250台を届けることができました。

運営体制（2021.4 現在）

◎JHP 組織図



◎役員

代表理事	小山内美江子
副代表理事	今川純子
理事	佐伯蘭子、山岡修一、佐谷隆一
	吉岡健治、青野達司、脇田知子
	伊藤多栄子、中込祥高、矢加部咲
監事	櫛田正昭
顧問	今川幸雄、立石義明、岩本宗孝

◎東京事務所

区分	2019年度	2020年4月	2021年4月
常勤役員（定勤役員）	5名	3名	3名
職員	2名	2名	1名
職員（契約）	1名	0名	1名
パートタイマー	3名	3名	3名
ボランティア（定期）	1名	1名	1名

※2020年4月より常勤役員は定勤役員に変更

◎プノンペン事務所

区分	2019年度	2020年4月	2021年4月
職員（日本人）	3名	3名	3名
職員（ローカル）	7名	7名	7名
専門家（ローカル）	1名	1名	1名

※2019年度の数に従事者合計

今年度実施できなかった事業

新型コロナウイルスの感染拡大状況と感染拡大防止を考慮し、今年度実施できなかった事業内容は以下になります。

■ボランティア派遣



2019年に実施した「カンボジア体験ボランティアツアー」の様子

■天満敦子チャリティーコンサート



過去開催のチャリティーコンサートの様子

2021年度は、
2021年 8月14日（土）13:30～ 浜離宮朝日ホール音楽ホール にて開催を予定しています

■支援者訪問



2019年 カンボジアにて、ボランティア活動をする支援者の様子



JHP行動基準

私たちは、地球的視野を持って活動します。

- *開発途上国の人々と同じ目線で学びあいます。
- *より多くの人に新しい経験や自己研鑽の機会を提供します。
- *諸外国と日本を結ぶ架け橋（国際交流）の役割を担います。

私たちは、社会的に弱い立場の人々の自立を支援します。

- *主な支援対象である「子ども」に対して、ハード、ソフトの面から一人ひとりの未来を支えます。
- *国内外の災害救援時に被災者の自立を支えます。

私たちは、「できることから始めよう」を実践します。

- *人を活かし、一人ひとりの個性や能力が発揮できる組織を目指します。

私たちは、活動に関わる全ての人々がお互いに理解し合える関係を築きます。

- *プロジェクトを成功させるために、支援に携わる人、支援を受ける人と良好な関係を築きます。

私たちは、常に現場のニーズに基づき活動します。

- *現場のニーズが活動の原点であり、その状況を直接調査し、見極めた上で事業を立案し活動します。
- *現場の人々と直接交り、汗を流し、助け合い、学びあいながら活動を進めます。

私たちは、皆さまからのご浄財を責任を持って効果的に活用します。

- *支援者の思いに応え、報告や連絡を丁寧に行い、信頼関係を構築します。

私たちは、活動を進めるにあたり危機管理を徹底します。

- *役職員、ボランティアの安全（危険予知と防止）と衛生管理を徹底し、活動環境を整備し、事故なく活動を継続させます。

私たちは、以上の行動基準について、ヒューマンパワーを結集させて実行すると共に、時代時代に適した内容であるかを定期的に見直し、改定していきます。

制定日：平成25年1月11日

JHP・学校をつくる会 代表理事

山内美江子

アカウンタビリティ・セルフチェック(ASC)への取り組み



2016年3月25日、当会は国際協力NGOセンター（JANIC）が普及の中心となるASC2012にチャレンジし、必須項目は33のうち32、強化項目は8のうち6項目をクリアし、2010年2月に実施したときよりも6項目多くクリアすることができました。左のマークはJANICの「アカウンタビリティ・セルフチェック2012」マークです。JANICのアカウンタビリティ基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）についてJHPが適切に自己審査したことを示しています。今年度もASC2012の全項目クリアに向けて組織力の強化を進めます。



認定NPO法人

JHP・学校をつくる会
JAPAN TEAM OF YOUNG HUMAN POWER

〒108-0014 東京都港区芝5-14-2 鈴木ビル2F

TEL 03-6435-0812 FAX 03-6435-0813

E-Mail tokyo-office@jhp.or.jp ホームページ：www.jhp.or.jp

Twitter：@JHP_tokyo Facebook：JHP・学校をつくる会

本書の印刷は株式会社プロネクス様にご協力頂きました。